

明るい話
話

重い話
話

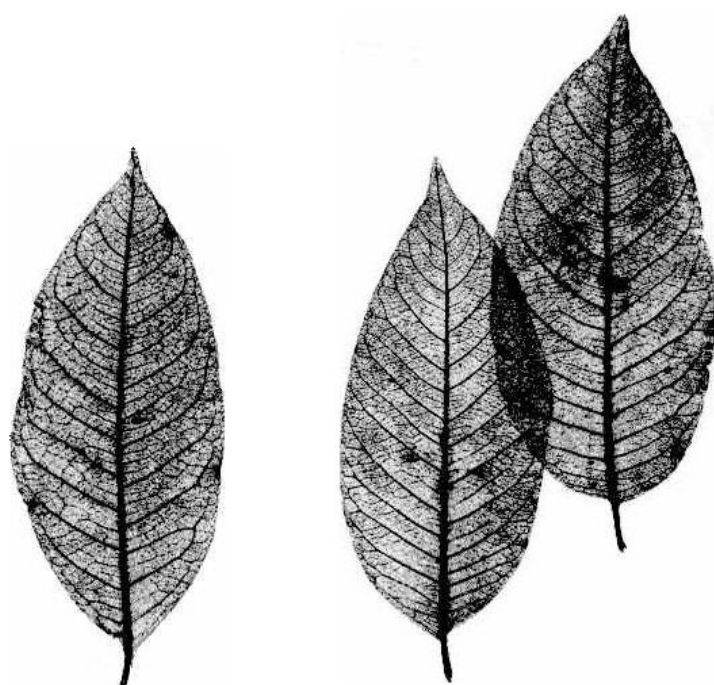
軽

く

深く

永六輔


知恵の森文庫



あか はなし ふか おも はなし かる
明るい話は深く、重い話は軽く
えい ろくすけ
永 六輔

2003年9月15日 初版 1刷発行

2004年4月5日 3刷発行

発行者—加藤寛一

印刷所—慶昌堂印刷

製本所—ナショナル製本

発行所—株式会社光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 編集部(03)5395-8282

販売部(03)5395-8114

業務部(03)5395-8125

振替 00160-3-115347

©rokusuke Ei 2003

落丁本・乱丁本は業務部でお取替えいたします。

ISBN4-334-78240-X Printed in Japan

Ⓐ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

明るい話は深く、
重い話は軽く

永 六輔

光文社

この作品は知恵の森文庫のために書下ろされました。

まえがき

この本はページを広げると、TBS「土曜ワイドラジオ東京」が聞こえてきます。そして各地でお会いした有名、無名の方々から聞いたお話、それぞれの所、それぞれの都市で講演した話が聞こえてきます。

TBS「土曜ワイドラジオ東京」は聴取率のトップにあり、つまり多くの方に聞かれています。

放送や講演は、本来空中に四散してしまうものですが、その四散する電波の中の言葉、講演の中の言葉を活字にしました。

スタジオや講演で話した僕自身が、ヘエーこんなことを話していたのだとビックリした本なのです。

僕が投手なら、そのボールを受けとめてくれたのが平松由美さん。

間違いなく僕の言葉ですが、だとすると僕はこんな人間だったのかと自分を再発見。放送や講演の言葉と、出版される文章の間にある深い河を見た思いもします。

永 六輔

●目次●

まえがき

.....

3

第一章 聴く

.....

7

第二章 見る

.....

71

第三章 触れる

.....

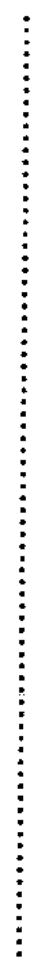
95

第四章 話す



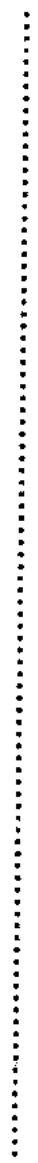
131

第五章 歩く



169

あとがき



194

第一章 聴く

「永さん、あなたは疲れ過ぎです。お休みください」

こんなありがたい言葉を、毎週のようにいただきます。書いてくださるのはラジオで私の放送を聴いてくださる方々。疲れが声に出ているそうです。

咽喉のどに優しい浅田あさだ飴あめのCMをもうずっと、やっています。その私の声に疲れが出ているというのは、浅田飴が無かったらもつと声が出ていないということ。もし老化だとして、髪が白くなるように声にはどんなシワが出てしまうのだろうか。

疲れだけじゃないそうです。TBSラジオの「土曜ワイド」は生放送ですから、生の私の状態が生で、伝わってしまいます。怒っていたり、風邪をひいていたり、時には途中で居眠りをしたり。

生放送の最中に居眠りをする、といっても、ほんの数分間くらいのこと。威張って

言うことではありませんが、もう名人の域に。

○

新幹線の運転手が運転中に眠りに落ちてしまい、何分間か意識がないまま新幹線は走りつづけ、自動制御装置のおかげで次の駅に止まった、というニュースがありました。この事件ですっかり知られるようになったのが、「睡眠時無呼吸症候群」(SAS)という症状。仕事中でも、何をしていても、眠りに落ちてしまうのが特徴と。

そういえば、人前でも平気で寝てしまう、という年下の編集者がいましたが、ひよっとするとあいつも……。なんと無作法な、とさんざん叱ってしまったことをちよつと後悔する今日この頃。

○

ラジオネームというものがあります。ラジオを聴いている人が、投書やリクエストをするときに、本名でははかれる場合に使う名前です。ペンネームのラジオ版。お節介に永六輔のラジオネームを考えてくれた人がいました。「出たきり老人」です。出たら帰ってこない、という僕の性格をちゃんと把握しています。

僕の番組では、ラジオネームを使わないことにしています。でも、「面白いネームを聴いたら、教えてください」とお願いしました。

「ラジオが一番、夫が二番」というのはあるご婦人のラジオネーム。「夜目、遠目、車の中」というのもありました。「斧おのの小町」さん、ちよつと怖そう。慶應OBの水戸黄門びいき鼻びいき肩びいきでしようか「三田校門」。こちらはルイ・アームストロングファンと思える「ニツチモサツチモ」。

「我が家の大革命」というテーマでお便りを寄せていただきました。一番多かったのが「インターネット始めました」、そして「インターネットを始めましたが、もう止めました」という挫折派させつぱあるいは守旧派の声。

いるとは思っていたけれど、本当にいたのが「IT革命には反対しているアナログ人間です」という意見。

「留守電もファクスありません。携帯もパソコンも持ちません。だから、出かけるときもアナログです。週に二回、映画を観ます、コンサートへも行きます。伝統芸能の会にも行きます。自分が必要とする情報は、自分の体でそれを使って得ています」。IT化へ怒濤どとうのように進む社会への、挑戦状のような葉書でした。共感しましたよ、私は。

IT社会に対抗するには、強靱きょうじんな精神力がなくてはならない。携帯電話を持っていないと言うと「フン」という表情を見せる周りの冷たさに、ひるんではならない。

「これからも絶対、携帯電話は持たない」という人は多いんです。

でも、街の中から公衆電話がどんどん消えて、いるのが現実です。携帯電話のシステムに事故があつたとき、確実につながるものを残しておこうという器量を、この国はもう失つたのでしょうか。

僕も携帯電話が便利であることは、使つた時に実感しています。仕事の折りに「これ、持ってください」と渡されるんです。打ち合わせてあつたことを変更するときなんか、とても重宝。それでも、個人的には持たない。結局、持つ派と持たない派を分けるのは一番の売り物の便利さではなく、情緒的なものかもしれません。

「パソコンを入れた友達に手紙を書いても、返事をくれなくなりました」という葉書。寂しい。この寂しさがIT情緒的反対派を中高年に増殖させています。

僕たちの生活に電話が侵入してきたときは、どうだったのだろう。

電話反対派っていたのでしょうか。



何年も経^たってから、なぜあの人とそこで出会ったのか、経緯が思い出せないことがあります。「あのととき永さんはああだった、こうだった」と聞かされても、記憶をつなぐ橋が見つからなくて、腑に落ちない顔のまま。

歳を重ねるといつそう心配になります。でも、小学校のころから、学校へ持って行く算盤^{そろばん}や体操着やらを、しょっちゅう忘れてましたね。そうなんです、惚^ぼけでもアルツハイマーでもなく、子どもの頃からの忘れっばさ。

女優の有馬稲子^{ありまいねこ}さんにもそう言われて、ドキンとしました。

「永さんと最初に会ったのはね、あなたが二十歳の大学生のときの、なんまいき（生意気）盛り。みんなで同人誌を出そうという集まりだったのよ。『五十歳過ぎの戦犯なんて仲間に入れてやらない。七十歳なんてよく生きてられると思うよ』、って言い

放ったのよ、あなたは」

覚えていない。今年、七十歳になったのは覚えていないけれど。

昨日のことにように、まざまざと記憶している出来事がある。でも、昨日の昼、何を食べたのか覚えていない。



綾小路あやのこうじきみまろ、五十二歳。漫談家であり司会者。彼が司会をしてきたのは、新宿歌舞伎町かぶきちょうのキャバレーです。ニュージャパン、ロータリー、不夜城といういまはもう無いグランド・キャバレーで、歌手やダンサーの前座として漫談を交えた司会を二十年もやっていた。キャバレー司会者からエンタテインメントの世界に転じた、最後の世代。

中高年のオジサン・オバサンの哀感を毒舌で笑わせて、急に人気者に。でも当の本

人は自分を冷静に見ている。

「ええ、三十年間売れなかった私ですから。咲いた花はいつか散る。登った山は必ず下ります。いまが花です」と、どこかニヒルだ。「だから永さん、厳しい目で見ていてください」と。

こんなことを言えるのは芸人としての自信がある証拠。

きみまるさんに敢えて聞きました。一緒に苦勞した仲間の芸人が売れてテレビに出ていると、どんな気持ちだった、と。優等生なら「嬉しいですよ!」というはずだが、きみまるさんは違った。ひとこと「口惜しかった」と。本音の言える芸人なら、きつとこう言う。

芸人を育てた歌舞伎町を朝早く歩きながら、きみまるさんの回顧のひとつ。「この街のネオンがあつたから、貧乏の辛さや寂しさから逃れられた」。

そこらの子どもみたいなタレントと、見る目が違う。